落石計画第三期レポート
2010 年 7 月 30 日～8 月 5 日

教育学研究科芸術系教育専攻美術教育
伊藤ちづる

はじめに

2010 年 7 月 30 日から 8 月 5 日の間、私は北海道の落石にある、旧無線局を展示会場とした「落石計画」というアートプロジェクトにおいて、展示補助作業をお手伝いさせていただいた。

「落石計画」の存在を知ったのは、およそ 2 年前、大学で開講されていたオムニバス形式の「かたち」という教養の授業中であった。200 人以上生徒がいる教室で、高浜利也先生が落石の様子や、その無線基地で開催されたワークショップのスライドを見せてくださったのだ。

当時はスライドいっぱいに広がる霧の風景に圧倒され、「寒そうだなあ。またずいぶんと辺鄙なところですごい事をしている人たちがいるものだなあ」といったような、漠然とした感想しか抱いていなかった気がする。しかしその中でも、霧がかった空気の中に置かれ、逆光気味に写った家の写真がなんとなく頭の中に引っかかり、授業中に配布されたパンフレットを、自分の資料ファイルにストックしたことは覚えている。

それから 2 年後、まさかその「すごいところ」に自分が行くことになるとは夢にも思っていなかったのだけれど、今の自分を見つめなおす良い機会だと思い参加を決意した。出発にあたり、私は事前にいくつか個人的な目標を持って参加しようと考えていた。それは大まかに１. 現場の空気をとにかく体感してみる。２. 同年代の、美術に興味のある人たちの様子を見てくる。3. 自分の制作について見直してみる。（できたら作品を設置して撮影してくる）といったようなことだ。本レポートでは、落石での 7 日間の生活の間、主に上記 3 つの観点から感じた事、考えたことを中心に、滞在中に撮影した資料を交えながら報告してゆきたいと思う。

現場での作業に関してー作家性の強さと場の力ー

今回現地で展示のお手伝いや、ワークショップの補助をさせていただきながら、なんとなく今まで体験した事がないような、奇妙な感覚にとらわれた瞬間があった。それは展示準備作業から始まり、特にワークショップの最後でピークに達していた。そしてその印象を一言でまとめると「これで OK を出して大丈夫なんだ」といった安堵感に近いものであった。

私は普段川崎市市民ミュージアムで学芸補助のアルバイトをしており、漫画部門の学芸員が作品を展示する作業を手伝ったり、資料の整理をしている。そこで展示が出来上がっていくまでを見ていると、美術館における多くの展示は「明確なゴールやテーマ」を設けていることが多い。また私が今まで経験したような、大学内や附属の小学校などに出向いて行うワークショップは、どこかしら「落としどころ」というものを用意していて、なるべくその目的から外れることのないように、子どもたちに言葉をかけたり、導入の部分を綿密に打ち合わせ、彼らにまんべんなく楽しみを提供するという傾向が強い。

しかし今回の展示は、非常にゆるやかな枠組みで企画が進行していた。そしてそのゆるやかさが、個人的には非常に新鮮で、心地よく感じられたのであった。なぜこのような違いが生まれたのだろうか。

それは重要とするポイントの置き方によるものかもしれない。ミュージアムのような公共施設は、一般市民のために開放された場所である。したがってそこで開催される多くの企画や展示は、何らかの教育的な目的があったり、作家本人が来館し、展示の構成を行ったとしてもどこかしら館に所属している学芸員の目指す方向性と、作家の価値観とをすり合わせながら、一般の人々にもわかりやすい展示を行う必要がある。また小・中といった義務教育を与える学校は、知識の習得が不均等になることなく、みな一様に、同じような水準の技術と知識を定着することが目標とされる。

一方落石での展示は、もっとほかのところに焦点をあてているように見える。大きく言うと、作品と、作家の制作動機が主軸となっているようだ。今回の展示はギャラリートークでのお話にあったように、作家が「この場所」で制作をする意味や、自分と制作、また他人と作品との間に生じる関係性を問い直すためのものである。つまり結果ではなく、過程や対話を重視した、実験的要素の強い企画なのである。それは版画という、彫りや刷りの過程で、自分の技術だけではコントロールできない要素がどうしても介入してくる技法を選択していることや、茶室制作において、作家がブロックの組み方をすべて決定するのではなく、ブロックの積み方や積む場所を、大枠しか決めず、あとは学生という他者にゆだねる形式をとっていることから見て取れる。

この企画における制作・展示空間は、ある程度の着地点をそれぞれが思い思いに描いていて、そのマクロな部分が大まかに統一されている。しかしミクロな視点でみるとかなり異なっている。つまり行為においてズレやぶれが混入したまま、各々が完成へ向けて進行しているのである。しかしそのズレやブレを雑音として排除しようとするのではなく、積極的に取り入れようとする「面白がり方」が、私にはとても新鮮に感じられた。

また展示と同様に、今回のワークショップでは、地元の子どもたちとろうそく作りをしたのたが、おのおのが作るろうそくの形や、付け加える飾りなどに対し、特に決まった統一性をもたせようという様子も無く、子どもに対する声かけも、比較的淡々としたものが多かった。大人も、子どもも、作家までもがなんとなく制作をはじめ、なんとなくきりの良いところで作業を終え、気に入ったところに飾る。ルールを純粋に守る人が比較的多かったといえばそれまでだけれど、単純に作る作業に没頭する人たちが集まってそうした空間ができたこと。さらにはこの展示空間が自然な自由さを許しているところに面白さを感じた。

たとえばこの企画と同じ事を学校の教室で行ってみたらどうなるだろうか。結果はずいぶん違ったものになるような気がする。場の力がもたらす強さを、どのように取り入れるか。展示や、多くの人と何かを行う場合、その行為に関してだけでなく、取り巻く環境を考慮する必要性を感じた。

自分の作品を配置してみてーワークショップの模倣ー

会期中、高浜先生からある提案を受けた。それはカタログ写真に写っていた家のワークショップと同じ場に自分の作品を置き、同じ構図で写真を撮影するというものだ。それにより、もとの作品に対して自分が良いと思っている点を分析したり、現在の作品との比較がしやすくなるのだ。そこで愛知県芸の方に協力していただき、写真をカタログと同じように配置し、撮影してみた。

結果

ワークショップでのコンセプトと、私の制作の動機が一致しているわけではないので、厳密にはコピーと言い切れない部分はあるが、せめて、気に入った外観だけでも模倣してみようという気持ちで撮影していたはずであった。しかし、実際に見てみると、写真の構図も配置もほとんどコピー元と合っていない。撮った写真に納得して無線局をあとにしたように思えたのだけれど、帰宅して確認してみたら、あまりの違いに笑いすら込み上げてきた。撮影のための光量などにも違いはあるが、主な原因として考えられるのは、模倣した作品のサイズと作品の作られ方の違いだろう。ワークショップの作品たちと、自分が作ったものを比べてみると、まず高さと大きさが異なる。高さがあるということは、3次元方向へも伸びしろがあるため、見え方が複雑になる。またある程度の大きさがあれば、遠くから見たときにも全体の形や様子が見えやすく、こうした逆光がきれいに見える展示空間においては、シルエットで作品を見せることもできる。

私は今まで作品作りは大学の教室内で行っており、作ったものを置く場所も、できばえを確認するのも、教室の中の、机の上だけで完結していることがほとんどであった。そのため、いざ展示をするとなると、それぞれの家の位置関係、その家が置かれる場所などの判断に困り、見せ方と自分の持つ作品のイメージのあやふやさが浮き彫りになってきてしまうのであった。どうしても塗ったり切ったりしている作業工程にうっとりしてしまい、作るだけ作りっぱなしで満足する傾向が強いのである。「この場所に置くとしたらどんなものを作るか」はじめにそうした制限を設けて作品を制作してみることにより、もしかしたらそうしたあやふやさがなくなったり、作品自体にも何らかの骨組みができるかもしれない。光や質感、空気の緊張感が強い無線局の空間だからこそ気がつけた問題だと思う。

空き時間の様子－愛知の方々と

展示作業以外の空き時間では、愛知県芸の方々にアドバイスをいただきながら、落石周辺で作品を置いて撮影も行ってみた。彼らは集団生活に不慣れな私に対し、とても早くから打ち解けてくださり、作品に対するアドバイスも非常に的確で、真摯に答えてくださった。

大学では母体数も少ない上に、制作をしている人数も限られているので、こうした作品に関する話ができる同年代の存在は、とても心強い。少し浪人中の予備校生活を思い出し、懐かしくも感じた。私の悩みのある部分は、彼らが現在抱えているようなものであったり、また通り過ぎたものだったようで、彼らの近況とともに誠実に答えてくれているという様子がよく伝わってきた。

今回、作品を持参したことで、みなに触って貰いながら、自分では考えもつかなかったような制作の方向性についてのお話を聞くことができたし、今至らない部分を具体的に指摘してもらえた。多くの人に見せるということは少し恥ずかしいけれど、現物を見せるとその分返ってくるものも大きい。他者へ見せたり、対話する期間と、フィードバックを元に内省する期間とのバランスをうまく保ちながら、自分がより納得できるような制作をしてゆきたいと思った。

おわりに

落石にいる間中、私は自分が透明になったような気持ちがして心地よかった。生活はシンプルで、起きて、ご飯を作って、作業をして眠るといったサイクルが続き、悶々と悩むような時間がなかったからだ。こんな気持ちを継続したまま地元に帰れればと思いながら、帰りの飛行機に乗った瞬間、すでに頭がぐるぐると悩み始め、先ほどまでの透明な感覚はなくなっていた。シンプルに感じられたのは、あの場において自分でゼロから動いたり、考えたり、指示をするといったような決断を下す必要がなかったこと、そして観光客が非日常空間を体感して、何もかもが目新しく見えるようなショックが原因だったのではないかと思った。田園風景というものは、そこで暮らす農民たちの目には「風景」として写らない。日々の暮らしの場であり、仕事場である。私は落石のあの場を、どこかお客様のような目で見ていたのかもしれない。もし今度訪れることがあるならば、もう少し自分とあの場の距離を縮められるような、何らかの取っ掛かりを持って参加してみたい。そしてシンプルで心地よいと感じられたことが、戻ってきてからの生活に取り入れられるのかどうか。しっくりくることとこないことを体感しながら、これから自分で探してみようと思う。